
引き籠もる暗殺一家

4 & 4 K

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

引き籠もる暗殺一家

【Nコード】

N2336E

【作者名】

4&4K

【あらすじ】

引き籠もることを推奨する家族VS義務教育を全うしようとする主人公。そんな一家の朝の風景。

(前書き)

本当は長編で出すつもりネタを短編にしました。製作時間は一時間ほどですが、一読いただければ幸いです。

引き籠もる暗殺一家

「真人^{まこと}、キサマ、まさか学校に行くつもりではないだろうな？」

登校前、そんなオヤジの一言が俺を引き止めた。

普通の学生なら逆のことを言われることはあるだろうが、風邪を引いているわけでもないのにこの台詞を吐かれるのは、おそらく俺くらいだろう。

「当然そのつもりだ。俺はまだ中学生だから、義務教育の真っ只中」
そしていつものことながら、応戦する俺。

オヤジは眉をひくひくさせながら、中年のくせにやたら筋肉質な腕をまくり、俺に敵意のある視線を向けてきた。

「何度言わせれば気が済むんだ、真人。学校は大勢の人間のいる場……隙を作らないほうが難しい、襲撃されやすい場所のひとつだぞ」

「あほか。だいたい俺、家業は継がないって言うてんだろ」

「親の家を継ぐのは息子の義務だろうが！」

出たよ、時代遅れの昭和脳。子供の権利をすべて親が管理するべきだと思っっている古狸め。権利だけでなく義務まで管理される筋合いはないけどな。

「お前、あれだぞ。もし学校行ったら……えと……」

おいおい、今考えるなよ……。もつと空気読んでから台詞考えろ。もつとも、その台詞もオヤジのことだ。別に脅迫にもならないことを口に出すに違いない。事件になりそうなことは、目立ちたがらないせいか仕事以外じゃやらないからな。

まあ、俺が警察に「義務教育を学ばせてくれない」と電話したら事件になってしまうが。

「……昼食は抜きだ！」

考えた末にそれか。

いつも家で喰ってるから、俺が当然昼食を食べるものだと思ってるんだろっけど……。

「いいよ。学校で喰えるから」

中学校には、給食というありがたいシステムがあるのだ。

「く、くそう！ ならば夕食抜き！ 今日にはベーコンとアスパラガスの……」

うわあ、別に好きでも嫌いでもないものが出てきた。反応に困るわあ。

「……そしてクリームシチューだ！ 夕飯食べなくなっただろう？ 食べたくなっただころで、さあ鞆を置くんだけ。お前はもう小学校で生きるのに必要な知識は学んだんだ。これからは影の人間として表舞台に出ることなく、ひっそりと暮らしなさい」

だが断る。

「オヤジ、前から言いたかったことがあるんだ」

「なんだ？」

「目立ったって言うけどさ、義務教育ほったらかすと逆に目立つぜ？」

「……………」

オヤジ沈黙。どうやらそこまで考えが及んでいなかったようだな。

「ウルトラシヨック！」

頭を抱えて玄関にうずくまる。こうなったら戦闘不能だな……ア
デイオス、オヤジ。俺は学生として、勉強に励むとするよ。夕飯は
グラムチャウダーをよろしく。

「お兄様、お待ちになって！」

家から出ると、すぐにランドセルを背負った可愛い妹が駆けて来た。
た。

左右につけたピンクのリボンは、俺があいつの誕生日に買ってあ

げたものだ。きつと成長しても、このまま小さくて可愛い美少女のままにいるだろう。

それが俺の一番の望みだ。……ロリコンではない。シスコンなだけ。

それにしても……フフ、俺とは方向が違うのに、一緒に通学したいだなんて甘えん坊だなあ。まったく、モテる兄は辛いよ。

今夜はベッドで舞踏会だね。

「聞きましたわ、お兄様。お兄様が反抗期で、お父様の言うことを聞いてくれないって」

おま、お前は何を言っているんだ？俺はただ、義務教育を全うしようとしているだけだぞ。法的にも世間的にも正しいはずだ。

余談だが、妹の喋り方は俺が教え込んだ。オヤジは「目立つ喋り方を教えるな！」と、ニヤニヤしながら親指を立てていたっけ……。

俺が思い出の向こう側へ飛んでいる最中も、妹は続ける。

「反抗期は誰もが通る道ですわ……特に男の子ですもの。お父様と対立することもありますわよね。でも……お父様の気持ちもわかってあげて！」

ひし、と腕にしがみついてくる妹。未発達な膨らみを持つ胸の感触に、理性が息の根を止める一歩手前。

このまま欲望のままに野外プレイなんて考えも一瞬よぎったが、それはよくない。俺は常に、最愛の『お兄様』であるべきなのだ。

理性を蘇生するべく、俺は妹を優しく引き剥がした。……少し寂しい気もしたが、仕方がない。

「わかつてくれ。俺は法律で定められた子供の義務を果たすために学校に行くんだ。だからオヤジの指示には従えない」

「そんな……！お兄様、中学校はいつ命を盗られてもおかしくない場所だと聞きましたわ！」

「どこで!？」

「ニュースで！」

「確かに物騒な事件は多いけど、そりゃ大袈裟だよ！」

マスコミの過剰報道も考え物だな……。

「お兄様の分からず屋あ！」

半泣きで駆け出した妹。当然、俺も後ろを追……あ、スカート……
く……もうちょ……白！ さすが我が妹！

……おっと、もうそろそろ急がないと遅刻してしまふ。

妹には帰ったらアイスでも奢ってやろう。まだ小学生だし、機嫌は直るはずだ。

「わんわん！」

今度は、後ろからフェンリル（トイプードル）が追いかけてきた。

「おー、わざわざ見送りに来てくれたのか」

そういつて手を伸ばすと、フェンリルは俺のズボンを噛み、必死に引っ張っ……。

ブルータス、お前もか。

引き籠もる暗殺一家

(後書き)

感想お待ちしています。点数はいりません。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2336e/>

引き籠もる暗殺一家

2009年3月24日09時42分発行